

TOPIC

アクティブ・ラーニングの再考

商学部准教授 谷口 聡

「アクティブ・ラーニング」、教育界において近頃よく耳にする単語です。小学校から大学に至るまで、日本の学校の教育方法は足並みそろえてアクティブ・ラーニングに転換すべき、というような言説も見受けられます。「アクティブ・ラーニング狂騒」と言ったら言い過ぎでしょうか。私は、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の意義を認識しつつ、同時に現在の「狂騒」にはいささかの疑問を抱いています。

ALの普及と「なんちゃってAL」

「狂騒」の発端となったのは、2012年8月に出された中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」です。そこでは、ALが「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されました。その上で、「体験学習、調査学習、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク」などが、有効なALの方法として紹介されました。加えて、2014年11月に下村文科大臣(当時)から中教審に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問されました。この辺りから小学校から高校についても、教育方法をALに転換しなくてはならないかのような“空気”が生み出されたように見受けられます。

ALの普及に伴い、大きく二つの矛盾が生まれつつあります。第一に、ALはあくまで一教育方法であり、教育目的の達成のための手段に過ぎないにもかかわらず、ALに転換すること自体が目的化しているということです。第二に、能動的な学習形態であるはずのALが、無条件にやらなくてはならないかのような受動的な行為になってしまっていることです。ALの意義、目的、成立条件などが勘案されないままに、それをやらなくてはならないものという意識が拡大し、結果、一見すると学習者が能動的に活動しているように見えながら、実は教育者の意図に合わせて行動しているだけで学習には結びついていない『なんちゃってAL』

が生まれる事態になっています。私自身の実践が、そうになってしまっている可能性も否定できません。活動するだけにとどまるALでは不十分であり、真に求められるのは深い学びを伴う「ディープAL」という指摘もされ始めました。

ALと従来型講義の相互補完性

留意すべきは、ALはあくまで教育方法の一形態に過ぎないという認識を持つことではないでしょうか。教育方法のあり方の前提には、いかなる教育の目的・目標を設定するかという課題があります。学習者の興味・関心の喚起、伝えるべき知識とその質量、既存の知識と新たな経験の関連づけ、現象の観察から原則の理解への深化、自己認識・世界観の拡大…教育の目的は、学習者の発達段階と個性、彼らの経験と生活を前提に多様に設定可能であり、また、多様に設定しなくてはならないものでもあります。したがって、その達成のための方法も、教育者自身がその専門性と経験値から臨機応変に選択する必要があります。目的と状況に応じてALが有効な場合もあれば、従来型の講義が有効な場合もあり、これらは相互補完的な関係にあると捉えられるのではないのでしょうか。



アクティブ・ラーニング(ロールプレイ)の一場面

本号は講義やゼミ等で主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を行っている学生と教員とのインタラクティブ(interactive)な教育現場を中心に諸原稿を集めました。また、本学部で活動しているTA(ティーチング・アシスタント)の仕事内容や資格などが紹介されます。

編集委員会より

2006年大学院創設後に、TA制度が導入され、院生による授業・演習に関して教授をサポートすることを目的としている。仕事の内容は①出席の確認、②教材のコピー、③課題の確認作業はできるが、試験監督・試験等の採点には携われない。大学院の学生なら応募のチャンスがあるが、仕事内容が限定されるため、1科目2時間以内の作業だけが認められている。TAに一定の時給と交通費が支給されるため、人物や作業能力などが前提条件である。



鈴木よしみTA

1年間又は2年間のTA経験は、

自分の履歴書などの職業欄に記入することができる。例えば、2年前に修了した院生が、TAとして職業欄に記入したエントリーシートが話題になり、大変スムーズに希望した企業へ就職できたとの報告を受けている。

2017年度のTA担当の鈴木よしみさんは、大学院で会計学の修士論文をまとめ国税庁に提出することにより、税理士の税法科目免除制度を利用していた。めでたく次年度から税理士として活躍することが決まった。

2017年度の受講者が多かった手形・小切手法(約300名)、会社法(約280名)、法学(160名)の講義で、鈴木さんに出席の確認作業を全面的に補佐していただいた。一方、大教室での講義を担当している私は教育・研究に専念できるため、院生によるTA制度を利用している。

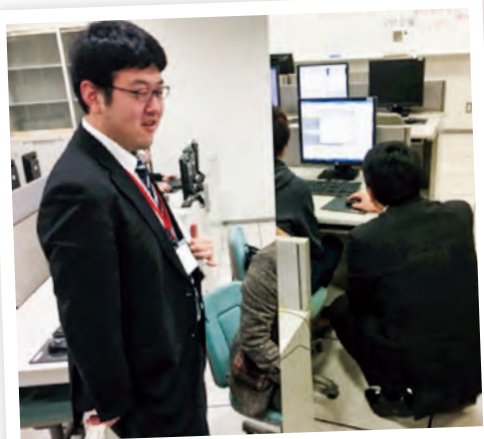
「プログラミング(COBOL)」(受講生約60名)では例年、TA(ティーチング・アシスタント)を配置して頂いています。この科目は実習が主体ですので、受講生のコンピュータ操作、プログラム作成・修正作業の割合が高い内容となっています。実習科目の一般的な傾向通り、本科目でも受講生の個々の学習進度の開きは、時間が経過するほど大きくなり、一斉指導よりも個別指導のウエイトが増してきます。このような授業展開を考慮すると、TAによるサポートが大いに必要です。

校内規程では、大学院生の教育機会の提供ならびに学部教育の充実を図るためにTA制度が必要であると定められています。しかし、本科目の場合、4月の授業開始と同時に、COBOLプログラミング全般にわたる専門知識と高度な指導力が要求されます。従いまして、十分な知識と経験を獲得しているTAの配置を特にお願ひしています。

2017年度、TAをお願いした北田航平さん(本学卒業生)は、本学

教職課程において高校「商業」「情報」の教員免許を取得しています。在学中に優秀な成績を修めたので、卒業時には情報コース代表にも選ばれました。現在、高校の商業科講師として勤務すると同時に、本学科目等履修生として他教科の教員免許取得も目指しています。実際の教育現場での経験を積むことで、その指導力は着実に向上しています。これらの点から、後輩の指導を担当する上でも同君は打って付けの人物です。

アシストされる側にとっては、同君のブレのない誠実な姿勢に感謝する日々です。また、指導教員自身の反省と研鑽を促す上でも、学生・教員両面の視点を知る同君から多くのことを学んでいます。一般に「三角関係」というと、三者の複雑な恋愛関係を指しますが、本科目では受講生・TA・指導教員のトライアングルな関係性からもたらされる、「学びの相乗効果」が高まるよう取り組んでいきたいと考えています。



学生目線での北田さん



全体を見渡す様子

TAの活用は、比較的早くから取り組み始め、平成16年度から始めました。ゲーム盤を用いる実習形式で行う「マネジメントゲーム」での取り組みが最初でした。この授業は、学生が小売経営者となり、売買行為を繰り返し、売上げ・利益を競い、その結果としての入出金・損益計算を行い、小売経営を実践的に学ぶことを目的としています。ただ、ゲームルールを覚えたり、計算を行ったりすることになり、その習



マネジメントゲームにおけるTAの指導様子

得には個人による時間差が生じやすいことが課題でした。そこで、一緒に担当していた大澤一雄先生と相談し、前年度における当該授業の履修者の中から、成績優秀者を選抜しTAとして、個別指導をしてもらうことにより、個人差を少なくすることができました。この取り組みは、私が当該授業を担当していた平成26年度まで11年間続きました。

このことを機に、プロゼミナールでも同様の取り組みを行うこととしました。前年度における、成績優秀者を選抜しTAとして、さまざまな補助を行ってもらいました。まずは、①履修登録です。実際に授業が始まっても、なかなか履修登録が定まっている1年生への手伝いです。また、②レポート・レジュメ等の提出物の例示、③プレゼンテーションの例示などをしてもらいました。さらに、④定期試験等の受験時の注意、⑤合否発表の確認の重要性の説明等、先輩学生ならではの大学生活を円滑に進めるためのさまざま留意点を、教員の後に実例を挙げて話してもらいました。

この試みは3年間続けました、今年については、残念ながら実施はしていません。また、機会があれば再開したいと思っています。

ゼミ紹介

卒業したら社会人！「演習」というゼミナール

に わ かおり
商学部教授 丹羽 香

専門的な用語で新たな概念が展開される講義を、耳をそばだてノートを取りながら受講、聴きながら自身の手でまとめてゆく中に、高度な知識や思考が培われる大学の授業。しかしながら、身につけたものを発揮することは容易ではありません。本ゼミはそれを「演習」、鍛錬する場としています。

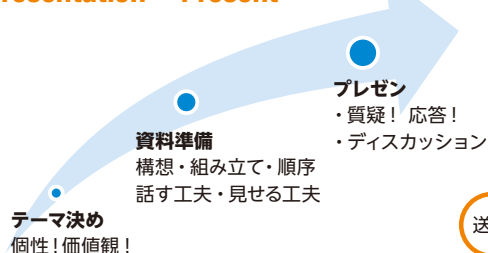
卒業したら社会人。組織の内外で能動的に考えて行動することに迫られます。言葉の習得に、理解語彙と使用語彙ということばが用いられるように、「わかった」と「できる」とには大きな距離があります。友人が聴き逃した授業内容など、いざ説明しようとする、分かっていたつもりのものがさて、伝えるのは案外、難しかったという経験はあることでしょう。ゼミの共通のテーマは中国ですが、就業に必須の「伝える力」の向上、上達を目指して、各自関心のあるテーマで「わかった」ことを「(相手に)分かりやすく」説明する練習をしていきます。

実際にやってみる過程の中に行動の基本が身につく、達成感の中に「できる」自信が生まれてきます。

重要なのが「聞く＝質問する」力。読んで調べて分かったこと考えたことを、ゼミ仲間にプレゼンテーション(「入力」したことを「出力」)しますが、事前に何をどのようにすればいいか、アドバイスを受けることが大切です。そして事後、互いにどこがよかった、どこが分かりにくかったと切磋琢磨、教員と友人と送受信を繰り返します。「聴き手」は「聞き手」でもあります。聴き手は仲間の努力を認め、その考えを尊重しつつ、分からなかったこと、もっと聴きたいことなど質問をします。「話し手」も「聴き手」も互いに耳を傾け、深め合う場が互いの成長の現場です。

ナントカやり遂げなければと迷走しつつも頑張る様子に、一喜一憂、悪戦苦闘しながら事前指導、事後補足、将来の社会人の姿を頼もしく見えています。

Presentation = Present



$$\text{送信} + \text{受信} = \text{自信}$$



館山セミナーハウスにて夏合宿

広辞苑(第7版)によれば、学問とは「勉学すること、武芸などに対して学芸を修めること。また、そうして得られた知識」であり、「一定の理論に基づいて体系化された知識と方法」と述べられている。問うて学ぶという行為と体系化された知の結晶という2つの意味が含まれているのであろう。学問は実社会では役に立たないといわれることがあるが、本当にそうであろうか。少なくとも筆者が専門とする商学の分野では学問は大いに役に立つ。例えば、今日において商店街の衰退が多くみられ、また、一部の大型商業集積においても往時の勢いがなく、経営方針の転換が迫られている。

その原因は何であり、打つ手はないのだろうか。元来、商業は地域の流通過程において必要とされる機能を果たしてきた。必要とされる機能が変化すれば、地域における商業の果たすべき役割やレーゾンデートル(raison d'être)も変化せざるを得ない。

では、商業の果たすべき必要とされる機能は何なのか。それはこれまでの商業理論において議論され、一定の学問成果が示されている。また、商業は地域性が強いことから、地域の街づくりとも関係があり、これについては街づくりの原理や街づくりマーケティング

の考え方が提示されている。

これらの理論・原理や考え方は、商店街等の地域商業集積が抱えている課題解決の糸口、アイディアあるいは発想の転換など有益な示唆や新たな視点を与えてくれることが多い。また、前もって商業理論や街づくりの原理、街づくりマーケティングの考え方を自分の中で消化、蓄積しておけば、今日の商業集積が抱えている問題に直面した時、その理論・原理や考え方を現実の実態に即して適用、応用することなどにより、筋道を立てて解決案を提示できるかもしれない。つまり、学問によって得られた理論・原理は知の結晶であり、これを活用することによって、現実の実態の問題に即した解決方法を見出す一助とすることができるのである。まさに、学問は力なりである。

退職に当たり、日頃心に抱いている一つの座右の銘を述べさせていただきます。謝謝。



在職期間：平成16～29年度

2017年度 授業評価アンケート集計

251科目対象(12,408履修者中、7,191名回答)

設問文	全体平均	強く そう思う	やや そう思う	どちら でもない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	有効 回答数
1. 授業内容について		5	4	3	2	1	
(1) 授業の内容に興味をもてた。	4.20	43.6%	39.4%	12.1%	3.2%	1.8%	7,173
(2) 授業の内容は体系的でよくまとまっていた。	4.27	47.4%	36.9%	11.7%	2.8%	1.2%	7,170
(3) 授業の内容は勉強の意欲をかきたてるものが多くあった。	4.10	41.2%	35.5%	17.2%	4.2%	1.9%	7,163
(4) 授業の内容は量的に適切であった。	4.25	48.4%	33.4%	13.9%	3.1%	1.2%	7,166
(5) 授業の内容はシラバスに沿ったものであった。	4.32	50.4%	34.2%	13.4%	1.2%	0.8%	7,155
2. 授業方法について		5	4	3	2	1	
(6) 授業はよく準備されていた。	4.40	56.4%	30.7%	10.3%	1.6%	0.9%	7,170
(7) 担当教員の熱意が感じられた。	4.34	53.7%	31.4%	11.5%	2.2%	1.3%	7,166
(8) 授業のテンポや進行具合が適切であった。	4.25	49.4%	32.7%	12.9%	3.4%	1.5%	7,164
(9) 担当教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった。	4.28	52.5%	29.8%	12.4%	3.6%	1.7%	7,160
(10) 板書の仕方は適切であった。	4.03	40.5%	29.6%	24.2%	3.9%	1.7%	7,146
(11) 映像機器が効果的に使用されていた。	3.91	38.3%	20.3%	37.4%	1.8%	2.1%	7,098
3. あなた自身について		5	4	3	2	1	
(12) この授業によく出席した。	4.42	58.0%	29.0%	10.5%	2.1%	0.5%	7,148
(13) この授業には積極的に取り組んだ。	4.23	47.5%	33.2%	15.5%	2.7%	1.1%	7,139
(14) この授業のために予習・復習をした。	3.64	30.4%	26.2%	27.4%	9.1%	7.1%	7,127
(15) 受講態度はよかった。	4.22	46.6%	33.4%	16.5%	2.5%	0.9%	7,114